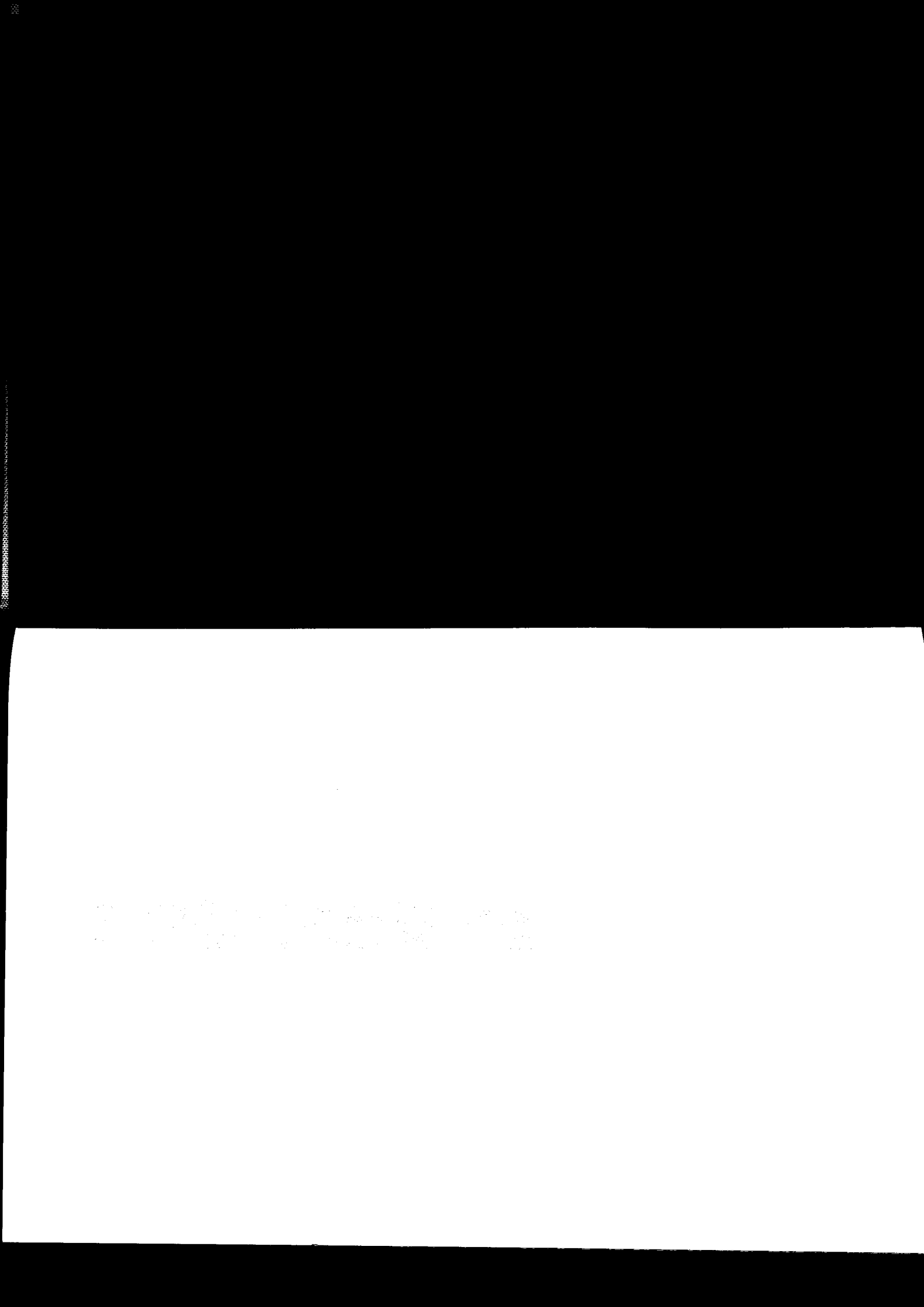


片桐洋一（かたぎり・よういち）　【編集委員】
1931年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。大阪女子大学名誉教授。主要著書『伊勢物語の研究［研究篇］［資料篇］』（明治書院）『伊勢物語の新研究』（明治書院）『源氏物語以前』（笠間書院）

山本登朗（やまもと・とくろう）　【編集委員】
1949年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。関西大学教授。主要著書『伊勢物語論　文体・主題・享受』（笠間書院）『日本漢詩人選集・菅原道真』（共著・研文出版）『平安文学研究ハンドブック』（共編・和泉書院）

鈴木隆司（すずき・たかし）
1970年生まれ。京都大学大学院博士後期課程修了。高知大学准教授。主要論文「在中将集の性質と成立（上）（下）」（『国語国文』67-2,3）「伊勢物語享受の一側面－新古今集・新勅撰集の伊勢物語歌－」（『国語国文』70-7）

日下幸男（くさか・ゆきお）
1949年生まれ。大阪府立大学大学院博士後期課程修了。龍谷大学教授。主要著書『細川幽斎聞書』（和泉書院）『近世古今伝授史の研究地下篇』（新典社）『歌論歌学集成』第14巻（共著・三弥井書店）『中世近世和歌文芸論集』（編著・思文閣出版）

大口裕子（おおぐち・ひろこ）
1976年生まれ。早稲田大学大学院博士課程単位取得。霞会館資料展示委員会学芸員。主要論文「伊勢物語絵百十九段と能〈松風〉－「形見こそ」の和歌を中心に－」（『美術史』160号）

伊勢物語古注釈大成（いせものがたりこちゅうしゃくたいせい）　第三巻

2008年（平成20）9月30日　初版第1刷発行©

片桐洋一・山本登朗　責任編集

装幀　右澤康之
発行者　池田つや子
発行所　有限会社**笠間書院**
〒101-0064　東京都千代田区猿楽町2-2-3
☎03-3295-1331㈹　FAX03-3294-0996
振替00110-1-56002

NDC分類 913.32

ISBN4-305-70043-8 C3395
藤原印刷・渡辺製本
乱丁・落丁本はお取りかえいたします。
（本文用紙：中性紙使用）
http://www.kasamashoin.co.jp

伊勢物語山口記

（鉄心斎文庫蔵）

山本登朗
大口裕子

忘るなよ程は雲井に成ぬとも空行月のめくりあふまて

ほとは雲井になるとは、我、人、あひ遠さかる義也。さりとも、めくりあふまて忘るなよと云心也。月はめくる物なれは、空行月のと云て其下へは友達の事を云也。此歌は、『拾遺』には橘の忠もとか歌と見えたる。(ナシ)かやうの相違多物也。其集之(ナシ)の義に随て心得へきよし、師説侍し者也。此歌は、風情面白歌也。只、歌はいかにも姿肝要の事とそ。

十二

十七

武蔵野はけふはなやきそわか草の妻もこもれり我もこもれり

まへの詞に、火つけんとすと云へるゆへによめる歌也。若草の妻とは、ほのかにもえ初たるを云也。是は女の歌也。若草の妻とはいへ共、我妻の心也。業平も我もこもる野なれは、けふはなやきそといへる心也。此段殊に作事也。

十

十四

みよし野ゝ田面の雁もひたふるに君か方にそよると鳴なる

此段、まことに此歌なとにて作れる物也。歌の心、みよし野は田多て雁のやとれる所也。我心人によるを面に(ママ)にいはて、雁にいはせたる物也。此ひたふるとは、永と云字をかけとも、只一向にと云心也。たのむは、田面也。五音なれは、憑かたへ用るによりてかくいへり。返し、

十五

我かたによると鳴なるみよし野ゝたのむの雁をいつか忘れん

雁は夜なく物なれは、君かかたによるとも、我かたによるともいへる也。心はあらは也。只我方による心を悦義也。

十一

十六

十三

十八

武蔵あふみさすかにかけて憑むにはとはぬもつらしとふもうるさし

むさし鐙といふ事、昔の天子へまいり初しを、其国の名をよひ付ていへる也。鐙はむさしよりまいり初しにより、むさし鐙といひならはせり。弓は信濃よりまいり初しかは、しなのゝまゆみと云ことし。当時に（も）ある事也。此歌は、業平、都に思人の方へやる文に、武蔵鐙と書し事あり。かけて思よしの事也。其後、女の方よりをこせたる歌也。さすかにとは、たのまれかたけれと、さすかにかけてたのむにはの心也。とはぬもつらしとふもうるさしとは、しのふ中のあやにくなる心也。うるさしは、只うきなと云、同事也。

十九

とへはいふとはねはうらむ武蔵鐙かゝる折にや人はしぬらん

前の歌の、あやにくにして一片(へん)になけれは、いかにすへきそと思ふ故に、かゝる折にやせむかたなくて人のしぬと云事もあらんと云心也。如此歌おほえても詮なくや。

武蔵鐙なとゝ連歌にすましきと云心也。

十四

廿

中〳〵に恋にしなすは桑子にそなるへかりける玉のをはかり

此歌は、『万葉』に

中〳〵に人とならすは桑子にもならまし物を玉のをはかり

といふを、少かへて作たる段也。恋と云物は、先あひみん事本意なれと、かなはねは、せめてしなはやと思へは、それもかなはす侍る時、中〳〵かく恋にしなてあらは、せめて桑子にも成へかりけりと云義也。玉のをはかりは、しはしのと云詞也。桑子をねかふは、契りのふかき物なれは也。

廿一

夜もあけはきつにはめなてくたかけのまたきに鳴てせなを

おもしろき歌なり。

十六

手をおりてあひみし事をかそふれは十といひつゝ四はへにけり

此段、有常は淳和、仁明、文徳三代は時にあひ侍しかとも、清和の御代におとろへはてゝ、たつきなき比、年比の妻、堪忍の心なくて、尼に成ていなむとする時、心さしすへきたよりさへなけれは、業平の方へ此よしをいひやり侍し歌也。四十年の契の心也。此歌のうちにかゝる契を捨て世をのかるゝ所の恨の心こもれる也。

年たにも十とて四はへにけるを幾度君を憑みきぬらん

心は、年さへ四十年の御契なれは、其間いかはかりか憑給ひけん、然は名残もさこそおはしますらめと有常の室の心を業平、有常にいへる心也。是は、女をたすけてよめる歌也。かく云やりけれは、ありつね

これや此天のは衣むへしこそ君かみけしと奉りけれ

夜の物までつかはすと云に、女のさうそくなともそふへき也。それをうれしくも哀にも思ひてよめる歌也。これや此天のは衣とは、業平の送たるさうそく衣共の事をあまのは衣そと先ほめてことはる也。業平のきたまへるみけしなれはと云義也。みけしとは、上衣と書。又、御衣ともかけりといへり。奉るとは、着する事也。車なとにのる事をもいへり。よろこひにたへて又読る歌、

秋やくる露やまかふとおもふまてあるは涙のふるにそありける

秋やくる露やまかふと思ふまてあるとは、我涙の袖に余をいふ也。其故は、秋は人をこれへしむる時なれは、其心にて、秋やくるといへり。露やまかふと思まてとは、露は山野草木のうへにをく物なるを、まかへて我袖へきてしほるかと思まて袖のぬるゝは、たゝいまのよろこひの涙にてありけりといふ心也。両首なから上にて疑て下にて其理をことはりたる歌なり。

十七

あたなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人も待けり

是は、ある女の本へ久しくたえて後、花盛に業平の来る時よめる歌也。業平兼て此めをあたなるやうに云けるを、今此歌に我身を桜になすらへてよめる。惣の心は、あたなりと名にこそたてれ桜花と先いへる義は、桜はあたなるやうに名にたてと、かう年に稀にとふ人をも待えて侍れは、あたには侍らぬ物をと云義なり。

今日こすはあすは雪とそふりなまし消すはありとも花とみましや

業平の心には、桜のあたになきにては侍らす。今日ちらぬさきにきたれはこそあれ、あすにもきたらは雪とふりぬへし。然は、木の本なとの雪をありとはみるとも、本の桜とは見ましき物なれはと云は、女のうつろはぬさきにきたれはこそあたにはおはせぬやうなれと、よそへいへるなり。

十八

くれなゐに匂ふはいつらしら雪の枝もとをゝにふるかとも見ゆ

是は、小町か方より業平に送る歌也。心は、好色の人とみれは色なき人にこそあれと、業平を云心也。紅をは好色にたとへ、雪をは色なきによそへていへり。返しの